

吉田裕
hiroshi yoshida

吉本隆明

三部作
解説の
試み

幻想

生成論

吉田裕
Yoshihiro Yoshida

幻想

大和書房

生成論

吉田裕（よしだ・ひろし）

一九四九年生まれ

早稲田大学文学部卒

現在、早稲田大学助教授

著書『吉本隆明とフランシヨ』（弓立社）

『詩的行為論』（七月堂）

現住所 埼玉県志木市館2・3・2・503

幻想生成論

——吉本隆明三部作解説の試み——

一九八八年六月一日 初版発行

著者 吉田 裕

発行者 大和和明

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号 一―一二

電話 (二〇三)四五一一

振替 東京六・六四二二七

印刷所 暁印刷

製本所 ナシヨナル製本

装丁者 菊地信義

落丁本・乱丁本はおとりかえします

ISBN4-479-72026-X

©1988 H. Yoshida Printed in Japan

はじめに

私の年代としてはごくありふれたことだろうが、吉本隆明氏の著作にはじめて接したのは六〇年代の末、大学にはいった頃である。私はまず現代詩の世界に惹かれ、氏に出会ったのもまず詩を通してであった。そして詩から少しづつ批評の方へと手をひろげていったが、その水先案内のひとつが氏の著作であった。当時界限の書店や古本屋ではどこでも、『言語にとって美とはなにか』の勁草書房版の二冊本が目につき、私も年上の友人の教示に従ってこの書を手にした。それはもっぱら現代詩が分析の対象になっているからだだったが、むしろこの読み方で、この書の全体を理解できたわけではなかった。同じ頃『共同幻想論』が刊行され、これはすぐ読んだおぼえがある。「心的現象論」は、噂には聞いていたが「試行」を求めるところまではゆかず、読んだのは単行本になってからだった。

要するにこの頃は私にとっては乱読時代であり、氏の書物も雑多な関心の対象のうちのひとつだったにすぎない。けれども、それからしばらくして、おきまりのように壁に頭を打ち続けるような時期、否応なしに自分の問いのありかを覚らせられるような時期がくる。その時、氏の著作は私にはもっとも明瞭なイメージを結ぶもののように見え、私はほぼその全体を読むことになる。同じ頃、ほんのめぐりあわせから何かを書かねばならない破目になったが、右のようなわけで私は氏の著作を対象に選んだ。

私は当時、何か常に未決定なものであるというような、また不斷の転倒と反復が行われている地点があるというような強迫的な観念につきまといわれていたが、氏の著作の中にも同じような経験があるように思われた。このような関心の持ち方は、氏に対する当時の関心の持ち方一般からすれば、少し変っていたと言えるかもしれない。私の感じだが、多くの人々は氏を、直接に社会的あるいは政治的にと言うようなやり方で読んでいたようだったから。それに較べれば、私はひどく観念的な読み方をしていたのだろう。

社会的、政治的、また思想的、文学的を問わず、氏がどのような主題を論ずるにせよ、その基底には同じ思考のかたちがある。氏の中には不確実性を本質とするような地点があり、氏はそれを矛盾とか異和とか差異とか名づけ、そこへ到達しようと試みては、そこからはねのけられる。しかし興味深いのは、この試みと挫折が、同時に思想的な構築の原理ともなっているらしいことである。私は氏のこのような営為に強く印象づけられ、それがもっともわかりやすく現れている氏の初期の作品を発端として、この試行の様態と行末を自分に明らかにしてみようとした。それが先の『吉本隆明とブランショ』（弓立社、昭和五十六年）の二つの吉本論である。

これら二つの論文から今回の三部作を読む試みは、いくつかのやり方で関係づけられる。『言語に
とって美とはなにか』『共同幻想論』そして『心的現象論序説』が氏の頂峻をなす著作だというのは世評の通りであるから、これらを読まなければ氏を読んだとは言えないという気持があった。また思考方法という基礎的な水準での読解は一応終えたのだから、具体的な問題をもっとも厳密に扱った書物にぶつかってみるべきだとも考えた。あるいは、三部作のいずれについてもその全体に対して十分に妥当な読み方はまだほとんどされておらず、いわんや三部作の総体に対して視点を一貫させた読み方はされていないと思われたので、それをやってみる価値はあるのではないかと考えた。

野心めいたものがまじってはいたが、三つの著作を読もうとしたことに内心からの願望があったことは確かである。だが、これらを読むには、思いのほか長い時間を要した。難解さ、つまり氏の仕事の困難さは、いや増しに増してゆくようだった。三つの書物ともそれぞれ言語、幻想、心的現象の発生、すなわち初源の地点にまで溯り、しかもそれを現在の私たちの水準にまで導いている。控え目に言っても、これは恐るべき想像力と思考力ではないか。ただ私には、これら三つの場面を貫く論理はつねに同一であり、受け渡されながらその強靱さと厳密さを高めてゆくように見えた。この点については私の関心は以前と変わらなかったと言わなければならぬ。私の関心は、氏の描き出す言語そのもの、国家そのものの、精神そのものの姿に向かうと同等以上に、これらのものごとについて執拗に問いかける氏の姿勢に惹かれ続けた。

私をもっとも強くうたれたのは、氏が常に最初の矛盾を意識しつつづけていること、そしてこの矛盾が、人間の存在の根拠とその錯誤の双方を同時に意味し、そのために文学作品や国家またあらゆる心的現象が、単に構成されるだけでなく、常に解体の契機を孕んで不断の活動状態にあるように考えられていることであつた。この活動状態を知ることとはまた同時に、既成となつたものに対する批判の視座を定めさせ、氏の叙述を単なる分析や提示にとどめず、絶えず試み行為するところの思考の魅力を持ったものとしているように思われた。だから、私がこの矛盾とか異和とか呼ばれる部分に惹かれ続けてきたことも、あながち意味のないことではなく、それなりに重要な部分への関心ではあつたのだ。そして、このように問いの姿勢に着目することは、個々の主題を問う可能性を保持しながら、その基盤となつて、三つの書物に一貫する了解を共通のものにすることに有効なのではあるまいか。私は自分では、このようにして一貫した理解を取り出す作業をなしたように思っているが、読んで下さる方々はどうか判断されるだろうか。

氏はどこかで、秀れた書物は、私が私自身であるごとくおまえはおまえ自身であれ、と語りかけてくるものだと書いていた。たしかにその通りだと私も思う。だがそうだとすれば、私が氏のうちに見出した問いは、氏から読者たる私に負託されて、また私自身のものでもある問いなのだろうか。それはどのようなにして私の問いなのだろうか。こうしたことを確かめることが以後の私の課題であろう。最後になったが、ここに収められた論文を読んで下さるならば、少くとも、対象とされた三つの書物に対する筆者の敬意は知っていただけのことと思う。

幻想生成論——目次

はじめに——Ⅰ

表出する人間

——『言語にとって美とはなにか』解説の試み——

I 二つの経路——14

2 言語の発生と進化——23

3 表出の展開——31

4 表出史——44

5 詩、物語、劇の流れの中で——56

自然から意識へ

——『共同幻想論』解説の試み——

I 『共同幻想論』はどこから来たか——66

2 禁制と幻想の発生——70

3 最初の構成——76

- 4 死と共同幻想——85
- 5 性と生誕——90
- 6 分離から対立へ(1)・共同幻想と対幻想——100
- 7 分離から対立へ(2)・共同幻想と個体の自己幻想——105
- 8 最初の「国家」——116
- 9 二重性をめぐって——124
- 10 矛盾の不能化について——132

心的なものの行方

——『心的現象論序説』解説の試み——

第一章 思想的起点——142

- 1 三つの書物——142
- 2 原生的疎外の領域——146
- 3 フロイト批判——152
- 4 共同幻想批判は可能か——160

第二章 反復される疎外——169

- 1 時間と空間——169
- 2 純粹疎外——176
- 3 知覚——181
- 4 關係と人間——187

第三章 心的構成——192

- 1 何をどう読むべきか——192
- 2 「感情」の心的構成——194
- 3 「言語」の心的構成——200
- 4 「夢」の心的構成——207
- 5 「心像」の心的構成——218

第四章 心的なものと現実的なもの——234

- 1 現実的なものの二つの様態——234
- 2 「感情」の場合——237
- 3 「言語」の場合——240

4 「夢」の場合(1)——244

5 「夢」の場合(2)——252

6 「心像」の場合(1)——259

7 「心像」の場合(2)——265

第五章 想像力を求めて——270

1 想像力の機能——270

2 「社会」と「国家」——274

3 原像と想像力——281

4 思想の終りを想像力へ——285

あとがき——293

初出一覧——300

幻想生成論

——吉本隆明三部作解読の試み——

表出する人間

——『言語にとって美とはなにか』解読の試み——

Ⅰ 二つの経路

詩作を別にした文芸批評上の吉本隆明の代表作は、と問われた時、『言語にとって美とはなにか』、『共同幻想論』、それにまだ書き継がれている最中だが「心的現象論」をあげることができよう。これらは質量ともに、他にくらべて群を抜いているからだ、もっと明確に他との差異を指摘することもできる。すなわち、この三つの書のところで吉本の姿勢ははっきり転換する。かつて彼は批判のために書いたが、今や自分の思想を積極的に表現しようとすることになる。『言語にとって美とはなにか』の序文で、へもう自分の手で文学の理論、とりわけ表現の理論をつくりだすはかないと思ったと書かれているのはこの転換を証明している。彼の内では原理は明瞭になり、他人の言説との関係によってではなく、自分一人に依拠して立つことが可能になったのだ。

原理と言えば、これがその本性なのだが、吉本の原理は三つの著作に一貫している。正確に言えば、これらの著作はしばしば言われるように彼の原理の三つの部分をなしていると同時に、それぞれの内に原理の全体を含んでいる。後者の意味では、三つのうちの最初である『言語にとって美とはなにか』のうちに、既に原理の全体を読むことができる。しかもこの書の場合、原理ははじめてであるためにいっそう鮮かにあらわれ、その上様々な論証の過程を引きずっている。だから、この書を読解することとは、吉本のもっとも深い思考を知るために不可欠でもあれば、またもっとも確実な方途でもある。